

第268回くらしの植物苑観察会 令和3年7月24日(土)

中世人のくらしと植物

村木 二郎(当館考古研究系 准教授)

中世は戦乱や飢饉が目につくために暗くて貧しい時代とイメージされます。しかし中世の遺跡を発掘調査すると膨大な遺物が出土することから、古代に比べると日常生活レベルで著しく豊かになったことがわかってきました。その背景には技術革新や流通経済の発達がありますが、人びとの身近なくらしには常に植物が関わっていました。

中世の人びとが何を食べていたか。日常生活について文献資料は意外に語ってくれません。当たり前前のことは書き残さなかったからです。そんななか、中級貴族の山科家の人たちは日記に食事に関する記録を多く残しています。『教言卿記』『山科家礼記』『言国卿記』から植物食物を抜き出すと、ざっと次のようなものがあります(吉田元『日本の食と酒』人文書院 1991年より)。

穀類：米・麦・粟・ひえ・そば

芋類：芋(芋頭・芋茎)・唐芋・山芋・こんにゃく

豆類：大豆・小豆・ささげ

野菜類：ネギ・にら・にんにく・しょうが・みょうが・せり・大根・なす・ごぼう

山菜類：うど・タケノコ・つくし・ふきのとう・よもぎ・葛・わらび

茸類：シイタケ・平茸・松茸

香辛料：わさび・山椒

果物類：瓜(江瓜)・ピワ・ヤマモモ・桃・くるみ・栗・柿・柑子・金柑・柚

庶民の食べ物を知る手がかりは、絵巻物や屏風絵などの絵画資料があります。絵画資料は華やかな主役たちだけでなく、背景のように描かれている人々の風俗に注目するとさまざまな情報が得られます。これすらどこまで実態を反映しているか疑問視する人もいますが、遺跡から見つかる情報でチェックすると、かなり信用してもよさそうなのです。

中世の食事を考えるときに重要なのは、遺跡から見つかる道具の変化です。万能の調理具すり鉢の登場と鉄鍋の普及は、人びとの日常食を大きく変えました。さらに漆器の椀・皿は日々の食事を豊かにしてくれたことでしょう。

中世の絵巻物には建築現場の様子がたびたび登場します。寺社縁起が多いので、その社殿を建てる場面が描かれるからでしょう。木を切るシーンに注目すると、共通点が見られます。ノコギリが木の葉形で、木材を木目に対して輪切り方向(横向き)にしか切っていないこと。縦向きに切る場合はノミを打ち込んでいること、です。日本のノコギリは古墳時代までさかのぼりますが、いずれも横挽きノコギリで、縦向きに切ることはありませんでした。

15世紀頃に中国から大鋸が伝来して、ようやく縦挽きノコギリが日本でも使われるようになります。それ以前の製材はノミを打ち込んで割り裂くために凹凸が著しく、手斧や槍鉋で平滑に仕上げないとはいけません。さらに規格の整った材をあらかじめそろえられないので、大きな材木を運んできて現場で製材せねばなりません。大鋸はこの問題を解決し、ほぼ同時期に出現した台鉋とあわせて、規格化された板材を量産することが可能になりました。

板材の量産は建築現場以外にも影響を与えます。日常生活で使う木製容器は、薄板を丸めてサクラの皮などで綴じあわせた曲物が一般的でした。しかし大型容器には向いておらず丸太を削り抜いた刳物の桶が使われていました。板材の加工が容易になると、短冊形の板を組みあわせてタガで締める結桶が普及します。板の側面も台鉋で削ることでより平滑になり、組みあわせ時の密着度が高まりました。このように、人びとの生活に欠かせない木製容器も、生産効率があがるとともに性能も向上したのです。

衣料には、絹・麻・木綿の織物があり、さらに琉球では芭蕉の繊維から芭蕉布が織られました。しかし絹は高級衣料、木綿は戦国時代になってようやく国産化された新しい素材でしたので、布というともっぱら麻布をさしました。

染色技術は早くから発達しており、絵巻物にもみられるように庶民もさまざまな色で染めた服を着ていました。なかでも代表的な染料は藍です。1367年の東寺の「学衆評定引付」に、藍が京都南郊の畠に植えられている記録があり、商品作物である藍は早くから栽培されていたことがわかります。また、『兵庫北関入船納帳』(1445年)には阿波や土佐の船が藍を運んできた記録が残っており、大都市京都へもたらされたと考えられます。

戦国時代の城下町である福井県一乗谷朝倉氏遺跡からは、染色を生業とする紺屋が見つかります。越前焼の大きな藍甕をいくつも並べて地面に埋めて据えつけているため、検出しやすいのです。一乗谷にはさまざまな職人がいたことがわかっていますが、紺屋は何軒も見つかっており、その需要の高さがわかります。城下町を貫く一乗谷川の水で晒していたのでしょうか。

このように中世の人びとのくらしにはさまざまな植物が関わっており、かれらの生活を豊かに彩ってくれたのです。



次回予告 第269回くらしの植物苑観察会 令和3年8月28日(土)

「外国人がみた変化朝顔」(九州大学理学研究院 准教授)

13:30~15:30 国立歴史民俗博物館 本館 講堂

事前申し込みが必要です。 定員 66名



<申し込み方法>